

第一回 WEB 国際会議（2011 年 10 月 15 日開催）

～発表者紹介、会議の趣旨～

村上先生 フッサール現象学の第一人者です。そのお隣は、稲垣諭さん。フッサール現象学の研究者であるとともに、幅広い活動をなさっておられます。こちら側は、カンブシュネルさんはよくご存じですけれども、大西克智さん、日本の若手デカルト研究者の第一人者です。そして、カンブシュネルさんの隣で手伝っていただいている方ですけれども、今、画面には出ていませんが、黒田昭信さん。セルジー・ポントワーズ大学の准教授で、黒田さんは INALCO 日本研究センター主催の 10 月 29 日に、恵比寿の日仏会館で開催される現代日本で哲学する、そういうシンポジウムのオーガナイザーをしていらっしゃいます。そして、こういうふうにとっても大変な仕事をいろいろな方に手伝ってしていただいているんですけれども、国際哲学研究センターの事務局の方々はもちろんのこと、三橋さんをはじめとして、東洋大学の研究協力課、情報システム課の方々、千葉さんをはじめとします ISS のの方々のおかげで、こういうことが実現できるようになりました。ここに感謝の意を表したいと思います。

さて、今日の会議の進め方をご説明申し上げます。まず、私からカンブシュネルさんの紹介をさせていただきます。その次に、山口さんからシュテンガーさんの紹介をしていただきます。そのあとに、カンブシュネルさんに 20 分ぐらいお話しいたします。お話しいただいたあとに、大西さんのほうから 2、3 質問をすることになります。そのあと、シュテンガーさんに、やはり 20 分ぐらい話していただいて、そのあとで、山口さんと稲垣さんに質問していただきます。そのあとで、できればカンブシュネルさんからシュテンガーさんに何かコメントをしていただければと思いますし、シュテンガーさんからカンブシュネルさんにコメントしていただければと思っています。そのあと、全体的な討論にしたいと思います。なかなか面と向かっていなくて難しいと思いますけれども、できるだけ気楽に話し合うことができればと思っています。

カンブシュネルさんの紹介をいたします。ドゥニ・カンブシュネルさんはパリ第 1 大学教授でデカルト研究の世界的権威でいらっしゃいます。1995 年に出版された *L'homme des passions*、『情念の人』と訳しましょうか、はデカルトの『情念論』の研究を基盤にしながら、心身合一体としての人間という視点から、デカルト哲学の全体を読み直すという視点を、これまでのデカルト研究史のなかではない視点を提供した大きなお仕事で、出版当時にフランスの研究者に会うとその度にあの本は読んだかといつも言われる、そういう非常に画期的なお仕事でしたと思います。その後、デカルト関係の仕事としてたくさんのお仕事をなさっていますが、一つだけ挙げますと、2005 年出版の『デカルトの形而上学的省察』という書物をお出しになりました。『省察』をカンブシュネルさんの先ほどの

視点から全部読み直すという試みです。今のところは全体の入門と「第一省察」までですが、おそらく頭の中では「第六省察」まで全部終わっていらっしゃるのではないかと思っております。カンブシュネルさんのお仕事と言いますか、人柄の広さについてですけれども、2000年には何と訳しているのか分かりませんが、*Une école contre l'autre* (『もう一つの大学』) という大学論についての書物もあり、1998年には『手 *La main*』という画集に、カンブシュネルさんの本名ではないんですけども、解説をお書きになっておられます。少年向けの書物として2010年には、これもどう訳しているのか分かりませんが、『意地悪のよい理由はあるの? *De bonnes raisons d'Être méchant ?*』という書物を出版されておられます。それから、これはまだ刊行されていないと伺っていますが、『伝説への旅 *Le voyage dans la légende*』という、ホメロスの世界に現代の子どもが入っていくというファンタジーをお書きになっておられます。もちろんたくさんデカルト研究論文がおりますけれども、現在はとりわけ新しいデカルト全集の編集に携わっていらして、『方法叙説』は既に出版されています。伺うところによると、『規則論 (Regulae)』はおしまいになられたのかどうかというところだと思います。以上でカンブシュネルさんの紹介は終わりにいたします。

次に、シュテンガーさんの紹介を山口さんのほうからお願いいたします。

山口先生 非常に内容豊かなご紹介が村上先生のほうからなされたわけですが、ぼくとシュテンガーさんの関係を昔まで辿ると、長いお話になってしまいますので、かいつまんで、今、彼がどのような仕事に興味を持って研究なさっているかということを書いてみたいと思います。

今年の2月でしたか、ウィーン大学に新しい学科が創設されました。その学科は、*Philosophie in einer globalen Welt* と言いまして、「グローバルな世界における哲学」という学科が立ち上がったのですが、いわばこの学科は彼のために新しくつくられたような学科を意味します。なぜかと言いますと、彼の、2006年になりますので、最近の書物から紹介しますが、『*Philosophie der Interkulturalität. Erfahrung und Welten. Eine phänomenologische Studie*』という大著が出版されまして、これは上田閑照先生のお話によりますと、間文化哲学の日の出にふさわしい画期的な著作だと言われております。このように、彼の今、持っている専門領域というのは、いわば間文化哲学と称するに一番ふさわしいわけですが、もともとは現象学の研究から彼の研究が始まりました。博士論文をどのようなものをお書きになったか申し上げますと、ドイツ語で言いますと『*Ohne Warum – Versuch einer Phänomenologie des Ungrundes im Anschluss an den “Cherubinischen Wandersmann” von Angelus Silesius*』という本でありまして、訳してみると、「なぜという問いが欠けるときの (なぜという問いがないときなんですね) アンゲルス・シレジウスの、(これはどうやって訳しているのかわかりませんが) シェルビンの不思議な男に関する無底の現象学の試み」と、東洋の哲学で無底ということは聞くわけですが、西

洋哲学の中で **Ungrund** という、根底がないという概念がびたっと表れてくるような、いわばドイツ神秘主義の1つの特徴と言えらるうんですが、先々、東洋思想の根底に関わるような問題に触れる事柄を、彼は博士論文のころから問題意識として持っていたということが言えるのではないかと思います。

そのあと、いろいろな論文が続くのですが、中期に当たるものとして、『**Philosophie der Struktur. – “Fahrzeug” der Zukunft**』という、ハインリッヒ・ロンバッハ先生に掲げられた本がございます。このときには、既に京都シューレと言いますか、日本の仏教思想と、ロンバッハ先生が日本の思想に対して大きな関心を持たれていまして、この当時、既に東洋思想と西洋思想の対話ということに、彼の関心が向かっていたということがうかがわれます。彼はこの書物の編纂に当たっているわけです。今、申し上げましたように、新たに創設されました学科において、現在間文化哲学を推進していく第一人者と言えらるうと思います。

短いのか長いのかわかりませんが、このぐらいでご紹介に代えたいと思います。

村上先生 ありがとうございます。それでは、私のほうから今日の会の目的について少しお話しいたします。

今日の研究会は2つの目的を持っております。1つは、国際哲学研究センターが新たに設立された、その目的です。それを簡潔に申し上げれば次のようになります。現在、私たちは知的な共有基盤を持っていないために、人々が価値とか真理とか存在、そういうものについて協力し合って探究することができなくなっていると考えます。言い換えますと、現代社会において、相対主義に侵食された利己主義がもの考え方の主流になってしまっているのではないかと考えます。その状況を哲学研究者としてどのように捉え、どのように変革していくことができるのか。これが私たちにとっての大きな目的です。その目的に向かっている1つの試みとして、私たちは方法論研究、それも、あらゆる思考態度に、そして、あらゆる学問分野に適用可能である方法論を探究したいと考えております。それを、**Mathesis** という概念の数学的な起源を捨象して、取り外して、方法論における普遍性だけを抜き出して、新しい **Mathesis universalis**、あるいはフランス語になってしまいますけれども、**nouvelle méthodologie universelle** と呼ぶこともできらるうと思われます。

もう1つの今日の目的は、福島という1つの地方に起こったことでありながら、地球的な規模で影響を及ぼし、また、私たちの産業や文化の形態に大きな影響を与えてしまった出来事。ご存じのように、福島第一原子力発電所の事故に由来することです。この事故は私たちがその中を生きていかなければならない困難な状況を象徴的に示しています。皆さんヨーロッパで生活していらっしゃる方にとっては、直接的に生活態度を変更するというようなことにはならなないかもしれませんけれども、しかし、皆さんも人工的に作り出された目に見えない、音も聞こえない、触れることもできない、味わうことも、香りをかぐこともできない物質を摂取しておられます。私たちは、自分たちの健康を維持するために感

覚を頼りにすることができないという時代を生きることになります。

比喩的ではなく、私たちの生活は目に見えない物質に脅かされているということになります。この状況からもたらされる様々な課題、例えば、私たちは放射性物質の移動を知り、その影響を長い年月にわたって知らなければなりません。そのためには、1人1人の個人の健康維持のためには、大きな共同体と個人が、これまで以上に密接な情報交換をしなければならなくなると考えられます。また、疾病、病気を被る確率論的な割合が高まっているときに、私たちの人生設計はどのような影響を受けるのでしょうか。さらに、生命への影響が世代を超えて伝えられていくときの、後の世代に対する私たちの責任はどのように考えたらよいのでしょうか。

これらは大きく括って倫理的問題ですけれども、もう1つ、知識論的な問題も取り上げなければなりません。なぜならば、日常生活における感覚、知覚を介した認識の価値が甚だしく下落することになるからです。生きること、生命にとっての真理が見えないものに依拠することになるからです。今日の研究会がこれらの政治的、経済的、社会的な目的に真っ直ぐ向かうということではありません。そうではなくて、伝統的な哲学の知恵が現実の問題にどのように対応できるのか。例えば、古典的な言い方になりますけれども、感覚に前もってなかった何物も知性のうちにはない。そういう知覚経験に基づく知識形成の理論が、生活する上でさえ何の役にも立たなくなっているということであるわけです。そのような状況において真理を探究していくための共有可能な基盤をどのようにして形成していくことができるのでしょうか。

デカルトとフッサールの哲学的な方法論に着眼しながら、お二人にお話いただきたいと思います。それでは、カンブシュネルさんから先をお願いいたします。